

道具・材料 サミット

12月22日（木） 14:00～18:00

場所：京都リサーチパーク東地区

KISTIC2階 イノベーションルーム

手仕事に不可欠な道具・材料の生産が危ぶまれている。天然材料の枯渇や後継者問題、安価な代用品の台頭などを理由にいくつもの素材が姿を消そうとしており、それは伝統的な工芸技術の継承が不可能になることを意味している。本サミットでは、漆芸を支える「漆刷毛」「漆掻き」「漆精製・調合」と、和蝋燭の原材料となる「蝋蠟」に焦点を当て、それぞれの製作に従事する職人が現状を報告し、課題事例を共有し合った。いずれの職人も、工芸界の川上に位置する「緑の下の力持ち」であり、これまでその製作状況や仕事風景が公開されることはほとんどなかった。サミットには道具・材料の使い手である工芸の職人も多く来場してディスカッションに加わり作り手と使い手の活発な意見交換が行われた。



ファシリテーター
米原有二 YONEHARA Yuji
文筆家/工芸ジャーナリスト

1977年京都府生まれ。京都を拠点に主に工芸・職人・伝統文化を対象とした取材・執筆活動を行う。主な著書に『京都職人 一匠のてのひら』『京都老舗 一暖簾のこころ』（ともに共著・水曜社）『京職人ブルース』（京阪神エルマガジン社）など。京都造形芸術大学非常勤講師。

主催：京都府商工労働観光部染織・工芸課
協力：京都リサーチパーク株式会社

Kougei now

伝統工芸を未来志向のものづくりへ

www.kougeinow.com

人知れず進む 衰退。歯止めが かけられるか？

道具と材料は、職人のものづくりに欠かせないものだが、現在、伝統工芸の多くの分野において、その安定供給が危機に瀕している。今回は素材としての漆や塗るための刷毛など漆芸分野と、和蠟燭の原料となる榿蠟に焦点を当て、課題や現状を洗い出した。産地の減少や後継者問題、職人の収入確保など様々な観点から工芸界全体の未来を考察する。



田中信行さん制作の漆刷毛。人毛の束が檜板に挟み込まれている。毛が摩擦したら、鉛筆を削るように板木を削り、新たな毛を繰り出して使うことができる

写真左から、山内耕祐さん、田中信行さん、近藤都代子さん、米原有二さん（ファシリテーター）、田川広一さん、三嶋陽治さん、堤卓也さん

山内耕祐
YAMAUCHI Kosuke
漆掻き職人・漆芸家

京都府城陽市生まれ。高校、大学にて漆芸に関して幅広く学ぶ。2013年より、漆掻き職人である岡本嘉明氏（NPO法人丹波漆理事長）に師事し、ウルシノキの植栽や作品展への出展を積極的に行っている。現在、漆掻きや植栽の技術を後世に伝えるべく結成されたNPO法人「丹波漆」で理事を務める。

田中信行
TANAKA Nobuyuki
漆刷毛職人

東京生まれ。高等学校卒業後、父・正治氏のもと家職である漆刷毛製作の手伝いを始める。漆工芸において漆刷毛は欠かせないものだが、現在日本における作り手は全国でも2軒（4名）のみとなっている。漆刷毛製作の技術を次代へ引き継ぐための活動にも積極的に取り組んでいる。国・選定保存技術保持者。

近藤都代子
KONDO Toyoko
文化庁文化財部
伝統文化課
主任文化財調査官

東京藝術大学美術学部芸術学科及び同学大学院美術研究科で工芸史（漆工史）を研究してきた。1990年5月以降、文化庁文化財保護部伝統文化課工芸技術部門で無形文化財（工芸技術）及び工芸材料・制作用具の生産・製作等技術の保護行政に携わる。2013年から文化庁文化財部伝統文化課主任文化財調査官を務める。

道具・材料サミット

議論の端緒となったのは、**後継者問題**について。漆刷毛職人の田中信行さんは「今は職人の道に入る年齢が遅いため、昔のように長い修業期間は時代に合わない。でも、技術をすべて伝えるには数年では難しい」と話す。「修業の最初は座りっぱなしの日常に慣れること。普通の生活をしてきた若者が『職人の体』になるまでにはかなりの時間が**必要**。技術を覚えるのはそこから」。

漆掻き職人の山内耕祐さんは、修業時代から**安定収入の確保**に頭を悩ませてきた。「現状、漆掻きや植栽で得られる収入だけでは生活できず、漆器制作や農業を行いながら生計を立てています。後輩の職人は地域おこし協力隊制度などの公的補助を利用していますが、補助の期限を終えて独立した後の生活も同時に考えなくてはいけません」。

漆の精製に携わる堤卓也さんは「知ってもらわないと、漆芸文化を次世代に繋いでいくことはできない」と、**生産者**自らが発信する**重要性**について語る。

堤さんは今年、『うるしのいっぽ』と題した冊子を制作。小さな子どもにも理解できるように、漆の木から樹液を採り、それを精製・調合して、漆器ができるまでの過程を写真とイラストを添えて解説した。「私たち漆屋は、これまで『縁の下の力持ち』として表に出ることはありませんでした。しかし、『次代を担う子どもたちに関心を持ってもらわなければ漆の未来はない』という危機感から自ら情報を

届けることにしました。この数年は、教育機関などを中心に工房公開も積極的に行っています。**国内で消費される漆の約98%が中国産**。品質は安定していますが、国際状況や環境問題によっていつ輸入が止まるかわからない。まずは国産漆の現状と、塗料としての漆の特性への理解を広め、日本の漆芸文化の奥深さに感動してもらおう。それが、漆器を買ってもらおうための土台づくりになると思うんです」

2015年には文化庁が国宝や重要文化財の建造物の保存修復において原則、国産漆を使用する方針を決めた。文化庁の近藤都代子さんは「文化財保護法に基づく選定保存技術の制度によって、文化庁では、無形文化財の工芸技術の伝承や有形文化財の漆工品の保存修理に不可欠な『日本産漆生産・精製』の技術を選定し、植栽や漆掻き技術の伝承事業を支援しています。しかし、**文化財建造物の修理にすべて国産漆を使用するようになると、現在の生産量では確実に国産漆が不足するので、増産が必要です**。漆を採取できるまでに木が成長するには10年以上かかるので、今後は少しずつでも各地で植樹が増え、山内さんのような漆掻き技術者が各地で技術を継承していくようになればと思います」。

和蠟燭の材料となる榿蠟を、京都市・京北地域で生産を目指す和蠟燭職人、田川広一さんは「これまで榿蠟生産を支えてきた他産地の生産量が急激に落ち込み『本物の和蠟燭』をつくるのが難しくなってきた。脈々と続いてきた

伝統を自分の代で終わらせたくはなかった」と話す。

「歴史ある寺院で使ってもらおう和蠟燭が、石油系油や動物性油を使用した代用品に代わってしまっただけでは、伝統を紡いでいくことにはならない。『京都“悠久の灯”プロジェクト』で私自身が榿の植樹と製蠟を行う法人を設立したのは『もう人任せにしていられない』と考えたから。榿の木を植えて実から蠟が採れるようになるまで**5年間は労働ばかりで収入はありません**し、生産した榿蠟が売れるとも限らないが、私のような和蠟燭製造業者であれば、生産量すべてを買い取ることができます。今後、化粧品分野などで榿蠟のさらなる需要を開拓したいです」。

京北地域で榿の植樹や生育に携わる京都市・京北農林業振興センター所長の三嶋陽治さんは、「地域農家の方々をはじめとする**地元の協力を得られたことがプロジェクト推進の原動力となった**」という。「地元としては農業や林業に代わる新しい産業としての期待も大きい。いずれは、京北地域で榿蠟生産から和蠟燭製造までを行なう『地産地消』を実現できればと考えています」。

この日議論された話題はいずれも単一の事象ではなく、互いに複雑に絡み合う。田中さんの「**川上が枯れると、川下も枯れる**」という言葉が印象的だった。工芸の道具や材料の、そのまた素材の確保を急ぐ課題もあり、分業のどこが欠けても工芸文化を継承していくことはできない。



ろうそくの材料

和蠟燭（右）とその原料となるハゼの実（左）。榿蠟には保湿効果がありハンドクリームのような化粧品にもなる

田川広一
TAGAWA Hirokazu
(有)中村ロソク
代表取締役

(有)中村ロソクの4代目。2015年には、高品質な原材料「榿蠟」の調達が困難で、危機的な状況にある「和ろうそく」を存続させるために、京都の伝統産業を思う有志の3者が中心となって組織した「JAPAN WAX KYOTO 悠久(株)」を立ち上げ、京北で榿蠟の生産を目指す「京都“悠久の灯(あかり)”プロジェクト」を進める。

三嶋陽治
MISHIMA Youji
京都市・京北農林業
振興センター所長

京都府立大学農学部を卒業後、1982年から京都市役所に勤務。森林・農村及び公園に関する技術者として、森づくり・農村計画を追求してきた。2012年からは、京北地域の農林業振興の一環としてハゼやクロモジなどの新たな森林資源の開発と産業化のプロジェクトを進める。「京都“悠久の灯”プロジェクト」もその一つである。

堤卓也
TSUTSUMI Takuya
(株)堤浅吉漆店
専務取締役

北海道大学農学部を卒業後、2004年から(株)堤浅吉漆店入社。現在、漆漉し・精製・調合等に携わり、京仏具や京漆器などの伝統産業分野や国宝、重要文化財の修復分野において、ニーズに合わせた商品を提供している。また、漆の持つ可能性や魅力を、次世代を担う子ども達に伝える取り組み「うるしのいっぽ」を進めている。



堤浅吉漆店企画・編集の『うるしのいっぽ』

